三原史跡めぐり

“失われた遺跡への哀愁・古を偲ぶ”
その1　山陽街道に沿いて　(3)

末森清司

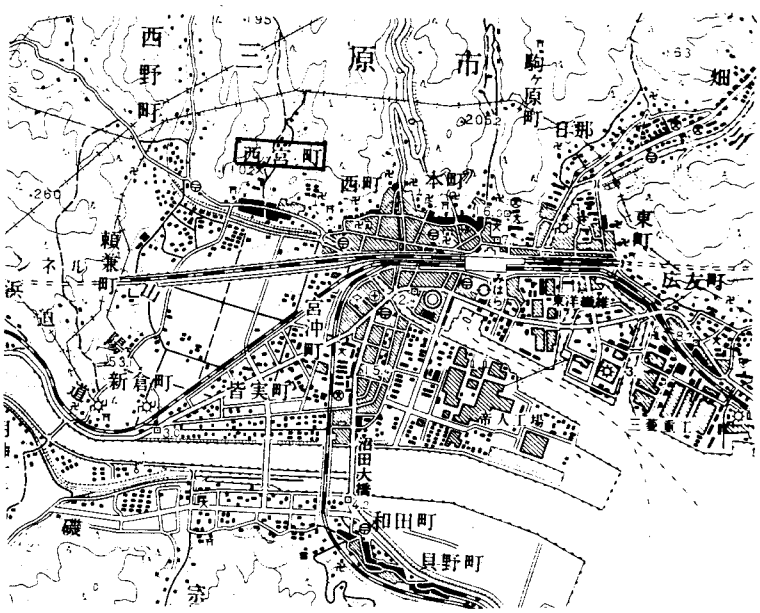
◉ 茅町

三原にあった古い市場町

三原市内本町より西町通りの旧山陽道を、西へ進むと北側山手に、三原八幡宮（西の宮神社）の大きな鳥居と石段がある。このあたりから山陽街道沿い祇園社（八坂神社）の石段下あたり迄の町筋が、現在は西宮町と町名が変っているが以前は「茅町」と呼ばれていた。

年輩の方々が今でもこの西宮町を呼ぶ時は、以前の茅町という言葉を出す位古くから伝わる地名でもある。この街道沿いの北側にある小浦の谷（西小学校のある谷）からは縄文時代の遺跡が発見されており大昔よりこのあたりには人が住んでいた。この地は北は山が連らなり南側は今の道筋近く迄海であり、冬は暖く生活し易い所であった様だ。

この地に市がたち、町として発展していったのはいつの頃か分らない。古文書によると、古くから市がひらかれ船の出入があり色々の物資の交易が行われたと記されており三原の海沿いに出来た一番古い市場町ではなかろうか。中世の頃、山陽道がこの茅町を通っており、人々の往来もかなりあったであろうから、市場町と同時に宿場町の役割も果していたかもしれない。古文書によると茅町には東から、板屋市・五日市・七日市と三つに別れておりそこに定日に市が開かれ次第に町として発展したと記されている。この町が往時栄えた証として、この頃市場町として栄えた土地には必ず祇園社がまつられており、茅町にも町筋の西の端、山麓に祇園社がまつられ今でもこの町内の人々から大切にされ毎年おまつりがなされている。



西宮町附近（1：5万 三原）
（茅町）

往時、茅町から木材や塩が船で積出されたとの伝えがあるが今の町の姿からは当時の栄えた面影は見いだす事は出来ない。茅町の事を記した古文書は以下のものがある。

- 「三原茅町差出張。寛政四壬子年」（1792）
- 「国郡志編集御用諸品書出・文化十一申戌年」
- 「国郡志御用ニ付下しらへ書出帳・文政二年」

これらの古文書から当時の町の様子をみると市場町としての姿はみえないが参考として転記しておく

◎寛政四壬子年　「三原茅町差出帳」　二月覚

一惣家数五拾八軒　内 | 弐拾六軒　上手
三拾二軒　沖手

内

一壱軒　社人居宅
一壱軒　鍛冶本役家
一壱軒　大工居宅
一壱軒　桶屋居宅

一五拾四軒 | 商売人 作人　居宅

一寵数　六拾八

右之外

一明屋鋪　六ケ所
一火除　六ケ所

一茅町分間数　五町三拾四間 | 西野境ゟ 西野村境迄

内

弐町三拾九間半　町内
弐町二拾六間　西町境ゟ茅町東之端迄
比分並木松三拾三本　内 | 弐拾壱本　上手
拾弐本　沖手
弐拾八間半　茅町西之端ゟ西野村境迄
比分並　松三本　内 | 壱本　上手
弐本　沖手

一祇園社　壱ケ所　但シ西野村地之内ニ御座候

以下略

◎「国郡志編集御用諸品書出」「文化十一申戌年」

一丁間五町三拾四間　但町内井前後共
弐町三拾九間半　町内
弐町弐拾六間　西町端ゟ茅町東端迄
弐拾八間半　茅町西端ゟ西野村迄

一家数五拾棟

寵数六拾三軒　内 | 五拾七軒　商売人作人居宅
壱軒　社人
弐軒　大工
壱軒　桶屋
弐軒　鍛冶屋

一惣人数百四拾四人　内 | 七拾五人　男
六拾九人　女

一男牛四匹

一祇園社

右社西野村土地之内ニ御座候得共、建物修理ハ茅町　仕来申候、六月七日十四日ニ西町地方江御幸神事御座候而、同所ゟ笠鉾通リ物ヲ出賑ひ申候、九月十四日者祭礼規式ニ而御幸者無御坐候得共、神酒御供備、社家中執行申候

一恵美須三社

下壱社 | 当時七日市伊左衛門方家内之胡ニ拝ミ居申候
中壱社 | 当時貞七与申者居申家ニ祭居申候、右貞七相果明家ニ相成申候
上壱社 | 当時友蔵与申者之門ニ小社御座候而、茅町中ゟ祭等仕尊敬仕居申候

右茅町三町繁昌仕候節、町毎ニ祭申候処、当時如是

一往古茅町三町二分、目代三人ニ而支配仕居申候由

東ノ端板屋市 | 板屋与申家目代仕居申候処断絶仕候
中五日市　安田屋右同断
西ノ端七日市 | 当時森田屋伊左衛門方ニ而、今ニ相続仕申候、夫故ニ同人方七日市与申候　屋号之様ニ相成申候

右茅町開発等之儀、年数相分り不申候得共、当時之西町井宮沖新開等開ケ不申内ハ、船なとも着繁昌仕候ものと相見、今ニ少々宛其形相残居申候、其節之書紀(記)等茂段々穿鑿仕候得供一円無御坐、外ニ古物類無御坐候

以上略

江戸時代後期頃に記されている茅町と往時市場町として栄えたと思われる様子とは大きな違いがある。江戸時代の茅町は山陽街道に沿

って戸数６３軒、人口１５０人前後のちいさな在郷町である。町並での商いをみると、草履、わらじ、縄類、場酒、餅菓子などである。市場町として栄えた頃の茅町の戸数、人口はどの位だったのだろうか。何の記録も残ってないので分らない……。この茅町は江戸時代に入った頃は市場町としての機能は完全に停止してしまったのではないか、その理由として

(1)茅町は西野川河口に当り又沼田川河口の影響もあり、両川の流す土砂の堆積により沿岸部が段々と浅くなり船の出入りがむつかしくなった。

(2)小早川氏が本郷にある新高山城から三原に城を移し城下町を作った。城下町を開くため本市（現沼田東町本市）、新市（理長谷町萩路）の商人及び住民を呼びよせたと伝えられている。（そのため本市、新市はすっかりさびれ今はわずかにその道すじのみを残し田畑となっている）。茅町の商人たちも、三原城下町の方へと移行したのではないか、そのため市場町のにぎわいはなくなった。

(3)江戸時代に入り各地で新田の干拓が行われた。三原城下でも前の号で書いた頼兼新田、横山新田、そして宮沖新田の干拓を行ったゝめ茅町町は市場町としての役目は完全に終ってしまったその後は古文書に記してある町の姿となって今に至っている。茅町は西宮町と町名を変え商店が並び人家が建ちにぎわいのある町として発展しつつあるが、古の面影はどんどん消えて行く。わずかに祇園社の江戸時代に建直された社殿拝殿と江戸時代の山陽街道の道すじのみが古を偲すのみである。

※「茅町」…「かやまち」と書いてあるが私たちは「かいまち」、「きゃあまち」と呼んでいた、本当の呼名は分らない。この茅町としての地名の由来は今の所筆者は調べてないので分らぬが機会があれば調べてみたいと思っている。

◉ **船津**　三原海沿いの古(いにしえ)の船着場と伝う

今の西宮町を通っている旧山陽道が西野川にかゝる梅観橋を渡り頼兼土手筋へ南へ向う三叉路のあたりが往古「船津」と呼ばれた地名があった。梅観橋バス停より１０メートル西野町へ行った所の道路の山側にお地蔵さんがまつってあり「船津地蔵」又は「船津のお地蔵さん」と呼ばれているところからも往時の地名が偲ばれる。「国郡志書出帳」によると昔はこのあたり船着場であったと記されており「茅町」が市場町として栄えていた頃このあたりが港としての機能を果していたのかも知れない。

「三原昔話・白松克太著」によると、往時この船津は三原海沿の所でいちばん最初に出来た船着場で荷物の積みおろしをしていたと言われている。船津地蔵はこの船着場の傍に１本の大松が生えておりこの下にこの尊像がまつってあったとの事である。

こゝから頼兼の荒神さん（近江堂）の所への渡しがあり渡し舟が通っていた、その松のふもとにあった石に渡し舟のともづなを結んでいたとの事である。古文書によるとこの頃の往還はこの船津の渡しから頼兼の荒神さんの岸につけ、そこより頼兼山の裾を通って大串の谷より山地へ入り迫の谷を越えて木之浜へと続いていた。（この道は昭和３０年頃迄はまだ人が通れたが今はうづもれて消えてしまって通行出来ない）。

古文書によるとこの地蔵の西の一基の法経塔があったと記されているが今は無い。

古文書に船津の記事が記してあるので転記しておく。

◎国郡志御用ニ付下しらへ書出帳　文政二年、御調郡　西野村

一、村内土地古今相違の様子

古は小西大西川祇園の沖小曲り之上辺ニ而海に入り両谷　其他積荷等ハ、当時法花塔の下船津と申処に而揚積仕候由、小浦ハ谷口に而川海に入り候旨ニ御座候、小浦と申す名も右に寄而の名と申伝候、以下略

一古跡

古往還

東桜山之後大目木より、西之宮山ヲ越テ下手与申所へ出、湯佐近之西むろ木之鼻ヲ越へ小浦通り、祇園之西法経塔之下船津、夫より近江堂へ渡、大串山ヲ越テ芸州へ移候由申伝候、　以上略

この船津という所、今はその面影はひとつもない、海岸であり、船着場であったという所は西野川が流れ堤防になっておりそれから南当時の海は干拓された新開であり今は人家が建ちこみ様子が変り往時をしのばすものはない。しかし往時の伝えを残すお地蔵さんは、今でも大切にまつられてあり地元の人の信仰を集めている由との事。

参考文献　三原市史　第四巻　資料編
三原昔話　白松克太著
三原志稿　他

受贈図書目録（1）

昭和60年7月30日現在

書　　名	発行年月日	発　行　者
下伊那の古墳・長野県下伊那古墳調査報告 ― 飯田市を中心として ―	S51. 7. 20	歴史民族研究会古代史部会
甲府盆地の古墳・山梨県古墳調査報告	S51. 12. 13	〃
甲府盆地の積石塚・山梨県古墳調査最終報告	S52. 5.	〃
古代史講演論集『前方後方墳』茂木雅博	S58. 5. 10	〃
秩父古墳調査中間報告書	S53. 11.	歴史民族研究会秩父古墳調査特別委員会
秩父古墳調査最終報告書	S55. 10. 18	〃
みよし風土記の丘 №1～11	S56. 2 ～58. 4	みよし風土記の丘友の会
ひがしひろしま郷土史研究会ニュース №110. 111～115	S58. 11 ～59. 3	東広島郷土史研究会
郷土史往来　№3. 4	S55. 3	松永湾郷土史会
〃　№5. 6	S57. 3	〃